

令和元年度（2019年度）熊本市青少年問題協議会 協議のまとめ

○「いじめ問題の現状について」

- ・総合支援課から熊本市小中学校におけるいじめの現状についての説明（いじめ防止対策推進法第14条第1項に基づくもの）

○テーマについて 「不登校児童生徒への支援について」

不登校児童生徒数が、全国的な傾向同様、本市においても増加傾向にある。また、不登校の要因として青少年問題が潜んでいることがうかがえることなどから「不登校児童生徒への支援について」をテーマとしたもの。

《協議に係る情報提供》

- ・熊本市小中学校の不登校の現状についての説明・・・青少年教育課

〈フリースクール関係者による説明〉

- ・九州ルーテル学院大学人文学部人文学科こども専攻 准教授 石村 華代
- ・不登校・引きこもり相談センター（NPO法人フリースクール地球子屋）代表 加藤 千尋

※その後、各委員において以下のとおり協議が行われた。

○荒木委員（小学校長代表）

- ・1つ目に、本市小学校における不登校の取組みについて、先ほど教育委員会からの紹介があったとおり、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなど、人数や時間的なものも充実してきている中で、それぞれの学校の対応が、落ち着いた対応になってきているような実感がある。これまでは何か事案が起きてから相談をすることが多かったが、今では、事前に訪問があり、教室を一緒に回ってもらい、子どもたちに話かけてもらったり、保護者に話を聞く機会を設けたりというような対応ができています。さらには、専門機関とつなぐというようなこともできてきています。
- ・2つ目に、学校としても、子どもたちの実態をよりしっかりとつかもうとしている。子どもたち一人一人が違うので、状況や家庭の背景等をしっかりとつかんだうえで、それぞれの学校の中で情報共有、情報交換をしっかりとやりながら対応している。また、小学校長会において、連絡、情報交換する中で、いろいろと相談しながら進めている。新任校長とか中学校から校種変更の校長先生方にも、役立っていると思う。
- ・3つ目として、最近特に校長会等で話を聞く中で、保護者の受け止め方、考え方が変わってきており、校長、担任の対応も難しくなっていると思う。どのように対応していくかというところも、いろいろと相談しながらやっているところではあるが、担任が子どもたちにしっかり向き合っているが、それぞれの子どもたちの背景として、保護者の存在が大きく担任だけではなかなか難しくなっている。学校全体が1つのチームとなった対応が必要だと感じている。
- ・最後に、保護者や子どもたちのケアに時間をかけて丁寧話をしていくというような姿勢が増えてき

ている。本市では一人一人を大切にされた教育に取り組んでいるところであるが、現状にあうような対応になってきていると思う。今後も状況を見ながら、しっかり対応していかなければならないと思っている。

○多賀委員（中学校長代表）

- ・私からは、いじめ問題について触れさせていただきたい。教育委員会の資料の方に、中学校での「いじめられたことがあるか」というデータは4.2%と、小学校に比べると低くなっているが、実際のところ深刻化している問題は、中学校の方が多いのではないかと思う。
- ・アンケート等も参考にはするが、見えないいじめも、潜在化しているのではないかと危機感を持って向き合っている。いじめが発覚した場合、先ほど文科省の指針から3か月間を継続的に観察するとなっていると説明があったが、心のアンケートを取る時期が年末で、それから取組むと、3か月というのが、年度をまたぎ、クラス替えをしたり、子どもたちが進学したりしていくことになるので、短期的な取組みと中期的な取組み、さらに先ほど、フリースクールの地球子屋さんが言われているような長期的な取組みも必要になってくると思う。
- ・よく言われるのが、解決させる方法として、お互いに保護者も交えて謝罪をするということで、一瞬解決したように見えても、子どもたちの中では、被害者も加害者もつらい思いをずっと持ち続けて暮らしていくようなこともあると思う。私たちが子どもたちに寄り添い切れていないこともあるということ念頭において、接していかないといけないと思う。
- ・それから、どうしてそのようなことが発生したか、先ほど言ったように三歩先くらいまで考えていくことも大事だが、三歩手前も振り返って、いじめが発生した土壌を探っていくといけないと思う。中学校の場合は、幼少期まで遡っていくことも必要かと思う。いじめが発生するときの前の段階では、子どもたちに粗暴な言動が見られたように思う。
- ・そこを見逃さず、そして、失敗するような発言があっても、一緒に成長の過程として受け止めながら、やさしい土壌を築き上げていく中で、いじめが発生しにくく、食い止める努力をすることも大切だと思っている。今後も、他の関係機関と連携を深めて進めていきたい。

○深水委員（高等学校代表）

- ・先ほど、熊本市内の小中学校の不登校生徒は1,200人ということだったが、高等学校の話を見せてもらおうと、熊本県の高等学校、市立公立を含めて、不登校生徒が、平成30年度、先ほどの文部科学省の調査で、842人で、1,000人当たり17.9という数字である。全国と比較すると、全国が1,000人当たり16.3で、全国より少し多い状況。本校の状況として、昨年度の不登校の数としては、1,000人当たり6人位で他校よりやや少ない状況である。
- ・高等学校は、高校入試を受けて入学し、単位を取らないと進級できない。卒業もできない。そういったこともあり、実際、不登校の生徒は少ないが、不登校はいる。その一番の要因は、中学校から高校に進学した環境の変化に対応できなかった生徒。あるいは進学したものの学校に馴染めない、友達との関係が上手くいかない、学力的な問題などといったところが、不登校になっていく生徒ではないかと思う。
- ・本校は、県立学校であるので、県教委からの支援があるが、基本的には、学校ごとにいろいろな取組

みを行っている。参考に本校の取組みを紹介すると、中学校から高校に入ってからすぐに、高校の生活に馴染めるかということを中心に考え、新入生宿泊研修を行っている。本校の場合は2泊3日で南関へ行っている。どの高校もそのような研修を行っている。また、生徒理解研修会というものも行っており、担任一人ではなく、組織として、学年として、学校として共通理解をもって生徒にあたっている。面談週間、三者面談、家庭訪問などを生徒理解のための取組みとして行っている。

- それから不登校生徒が実際に出た場合、当然、家庭訪問や家庭との連絡を取ったりしているが、本校にはスクールカウンセラー制度がある。本校の面談状況は、生徒が35名、保護者が19名、スクールカウンセラーの面談を受けている。今年度も1月28日現在では、生徒が28名、保護者が13名で、月に生徒が3名程度で、前任校より多くの利用があっている。先ほどあったスクールソーシャルワーカーの活用も行っている。また、単位を取らないと進級できないので、出席時数が不足した場合には、可能な限り補講という措置をとって進級ができるような対応をしている。
- また、特別な配慮を要する生徒への評価については、何らかの形で配慮をし、少しでも進級しやすくなるようなシステムを作っている。高等学校全体の話はできなかったが、一つの例として紹介させてもらった。

○大西会長

- 今、フリースクールに関するそれぞれの先生方二人の発表の後、学校の状況を小・中・高からいただいたが、これまでのいろいろな発表や意見を通して、何か意見、質問等、自由に発言をお願いしたい。先生方からも、フリースクールに対して聞きたいことがあれば、尋ねてもらえればと思う。
- 私から聞かせていただきたい。小学校の先生、中学校の先生、高校の先生、ある意味、不登校というのは学校にもなじめない、あるいは合わない、いろんな要因を抱えているという背景があると思うが、その子たちは問題児なのか。つまり、その子たちは今までの学校の枠にはなかなか入れない、あるいは何らかのきっかけがあって自信を失って来れなくなったとする。そうすると今までの学校システムというのは、どういうふうに変えたらいいのか、あるいは変えなくてもいいのかということが、今、いろいろお話があったが、特に印象的だったのが、多賀先生が、「子どもたちに寄り添え切れていないこともある。」ということを言われた。これは結構大きいことだと思う。
- 学校はどちらかという、何でも自分たちで解決していく、学校の中ですべて処理するみたいな状況が結構、私が学生時代からもあって、今に至っているという感じがあったと思うが、そうすると、今、実際には不登校の数やいじめが顕著な状況にある中で、例えば、フリースクールに委ねてみる部分というものが、あってもいいのではないかと思うが、今まで学校で対応されてきて、それが意味正しいと思ってきた先生たちからすると、フリースクールとか、不登校の問題については、疑問とか、抵抗感というものがあるように思う。率直な声を聞いてみたい。

○多賀委員（中学校代表）

- 先ほど社会的自立という言葉が何度か出てきたと思うが、私たちもそこは目指しているところである。ただ、その社会的自立の受け止めも、定義がはっきりしていないところもあるので、何を指すかということになるけれど、生涯にわたって、私はいろんな面で人と支え合いながら、自分のことをきちんと、生き抜くための力を身に付けていくことが大事だと思う。学校には、いろいろな子どもたちが

いるが、つらい目にあうこともあるし、喜びも分かち合っていくこともできると思う。ある面、いじめというのは絶対あってはならないが、意見が違う子どもと対立したり、あるいは尊敬しあったり、そういう場面が学校の中ではできると思うし、そういう経験を通して、さらに壁を乗り越えていく。将来、その経験をもとに生きていけるのではないかと、長年、学校で取り組んできた自負があり、正直なところこれまでフリースクールに関しては、果たしてそれが可能なのかという疑問をもっていたが、先ほど話を聞く中では、私たちは、卒業させてしまうと手を差し伸べようにもできなかった。できなかったことはなかったかもしれないけれども、そこで終わってしまったところの反省等あり、中には不登校であった子どもが、もしかすると引きこもっていないかなとか、心の中ではずっと心配はしていたけれども、そこは私たちにできなかったところであるし、気づけなかったところではないかなと思う。反対に今後は、そういうノウハウも学びながら進めていかなければいけないと思っている。

○大西会長

- 学校には対話とかいう場が本来あるはずだと思う。それがうまくいってるケースもあるだろうけど、うまくいかなかったケースについても、例えばフリースクールの手法とか、いろいろなメソッドとか、そういったものが教育現場に取り入れられていけば、もっと大きく変わっていくのかなあという感じも受けた。次に、今日のゲストの先生方からもお願いしたい。

○加藤代表（フリースクール地球子屋）

- 子どもたちは学校に行けるものであれば行きたいと感じている。行かなくていいとは思っていない。今まで学校に行かなくていいとはっきり言える子どもは大抵行かなかった。どうしても行けないということに対して、自分自身を自分で責めてしまうところがある。そこで自信を無くしてしまう。
- だから、学校は学校なりにどんどん改革を進められているし、以前でいうと総合学習とか今でいうとアクティブラーニングなど、新しい教育の在り方もある。本来こうした学習環境の変化もこれからもどんどんあると思う。そういった部分はどんどん進めてもらいたいけど、一方で、今、学校しかない子どもたちも思っている。行かなくなると自分はダメな人間だと思ってしまう。
- 先ほど教育の機会確保法とかでてきたけれど、いろいろな学び方や選択というものが実はあるんだ。高校になると通信制があるから、やはり義務教育の中でもそういう選択肢というものがあるんだ。それを選んでもいいんだというような社会になっていった方がいいのではないかなと思う。
- もう一つだけ言うと、お正月に子どもたちに大人になるためにどんな力をつけるか聞いた。ある男子中学生が「忍耐だ」と言った。それは今の大人がそれだけストレスや忍耐を抱えているのかというのをよく見ているからだと思う。すごく衝撃を受けたが、そういう社会が前提としてある。となると、社会全体のそういう大人が我慢しないで、いろいろな選択肢があり、いろいろな人生があるというのを認めていく。大人が変わっていくことで子どもたちにすごく影響があるのではないかと常日頃考えている。

○石村准教授（九州ルーテル学院大学）

- 教員養成を行っているので、やはり大学の仕事という点からは、いい教員を輩出しなければならないかなと思っているが、先生たちの手が足りないという問題がある。一人一人に行き届いた支援を先生方

も一生懸命されているし、したいと感じておられるけれど、教員不足という問題がある。そのような中で、なかなか学校での支援が行き届かない部分もあるのかなという気もしている。

- ・子どもたちの中には、クラスサイズが 40 人とかの中ではなかなかやっていけないなという子どももいるし、あるいは発達障がいなどの問題を抱えていてなかなかクラスへの適応が難しいというような場合もあると思う。そのような時に、フリースクールでは比較的どこも小規模でやっているの、細やかに目が行き届く部分もあると思う。
- ・それと、いじめとの関係でどうしても休養しなくてはいけないときがある。その時に家庭でずっと過ごしてしまうと、今はスマートフォンもあるし、インターネットにも接続ができるので、ゲームをしたりしてひきこもりの状態になってしまうような問題もある。緊急避難で家庭にいるようにしたのだけれども、結局引きこもってしまうというような状況で、不登校というようなこともあるので、その時にフリースクールが何らかの支援を行うことができるのではないかなと考えている。

○濱崎委員

- ・今、学校・家庭というのが子どもたちの居場所として大きく占めていると思うが、第3の場所が決定的に欠けていると思う。学校でもだめ、家庭でもだめ、第3の場所、フリースクールがその1つで、熊本市でいうと、例えば私もかかわっているが、遊び場、プレイパークなどがまさに子どもの居場所となっている。それともう一つ問題を絡めて言えば、本当は学童保育も遊びの場になっている。だから、その辺のところをもう少し充実していくことで、大きく変わっていくと思う。
- ・ただ、私が一番問題と考えているのは、このような場で議論するときに、「教育」という言葉だけしかでてこないこと。私が一番必要だと思っているのは「遊育」、遊び育てるというこの「遊育」という言葉が、もう少し世の中に広がればいいと思っている。先ほど忍耐という言葉もあったが、本来、人生とか仕事というのは楽しい場所であるべき。ところがその楽しみ方、「遊育」の場がほとんどない。昔は地域の中で、自由に子どもたちが遊ぶ場所が保障されていたが、今は「遊育」の場の伝承が消えている。だから、居場所がない、行き詰っている。これは、大人が最たるものだと思う。
- ・私から「この1週間、みなさんはワクワク、ドキドキした経験はありますか？」と聞くと、なかなか返ってこない。つまり、人生を本当に生きていない、遊んでいない、楽しんでいない、という現状が、大人の側から子供たちに伝わっている現状があるのだと思う。だから「遊育」の場を、とにかく今から充実させていく必要がある。具体的にいうと、プレイパークを20数か所、学童保育も相当あるが、学童保育は本来「遊育」、遊びの場である。その学童保育の場があまりにも教育の場になっていないか、もう一度見直すことで、随分変わってくるのではないかという印象を持っている。

○大西会長

- ・私自身もワクワク、ドキドキしたかなあ、どっちかというとはらハラ、ムカムカした1週間だったような気がする。そう考えると子どもたちを取り巻く環境、それと先生たちの余裕というか、人的な面も含めて大きいのかなと思う。他に地域や家庭か何かないか。

○吉村委員

- ・加藤先生方の話を聞いていて、自分がPTAに関わった20数年前のことを思い出した。その頃、一

番親しくしていた家庭の子どもが、小学校4年間ずっと不登校で、中学校もほとんど行ってない状況で、高校は検定を受けて大学に合格したが、2,3日行ってやはり無理だったということがあった。ただ、その当時は不登校の人数が少なく、まだ不登校に関する情報がなく、これは病気だという捉え方で、不登校になるとすぐ精神科に連れて行って、薬を飲ませたりするという時代であった。

- ・現在、その子どもは30歳代になり、特殊な芸術の分野で頑張っているが、親にとっては、子どもが不登校のとき、親も不安定になり安定剤を飲まないといけない状況であった。そのような状況をずっと見てきた自分にとって、加藤先生の話聞いて、隔世の感があるなど思う。当時情報もなかったが、今日の話のような情報を得ることができれば、不登校の子どもや保護者の状況も随分違うのではないかとつくづく感じた。

○大西会長

- ・他の委員からもまだまだご意見やご質問等がたくさんあると思うが、時間になったのでまとめたい。
- ・本日は、不登校児童生徒への支援に関わっておられる方々から貴重な話を聞かせてもらい本当にありがたかった。
- ・先生方からの話から各学校がそれぞれ苦労している現状もわかった。先ほど吉村委員から話があったが、当時は方法がなくて病院へ連れていくというようになっていたが、今は、いろいろな手段が、あるいはメソッドができていくこと。世代を超えて、あるいは組織や機関の枠を超えて繋がっていくことがだんだんできる時代になってきた。
- ・このような協議会を、この教育センターという場所で、学校の先生や各団体や機関の方々とフリースクールというものをこうやって議論するということが今までなかったことだと思う。
- ・これからますます連携というか融合ができると、子どもたちが、何らかのかたちで自信を取り戻して、問題を解決していくため、自分で変わろうとすることが大切である。自信を取り戻すと自分で変わろうとする意識が芽生えてくる。学校教育、家庭教育というのも中心にあるが、地域でも学ぶ場もあるけれども、それ以外のいろいろな多様な選択肢や場があり、見守っていくことが必要だと感じた。
- ・今日の不登校児童生徒への支援について、どうあるべきかというものも含めて引き続き検討をできればと思う。